

なかつたのかというと、そうではない。事実、古今は新古今より、ごくわずかではあるが、全歌数に対する用例数の比は大なのである。

このように、関心度はどちらも大差はなかつたが、使用する際の態度が異つていたと考へてよいだろう。すなわち、古今では、人から人へと、単なる摸倣として使用される傾向が強かつたのに対し、新古今では、もはや、単なる摸倣の域を脱し、新しい段階へと移行するとみてよからうと考へる。

〔三十二年卒業〕

八代和歌集に於ける『菊』考

平田 芙美子

八代和歌集に於いて菊は如何に表現され、人々はそれに対して如何なる思想を抱いていたか、また当時の菊はどういうものであつたか調査し、菊特有の歌の流れを考察したいと思ふ。

一、菊の歴史

菊の語源は何であらうか。『和名抄』卷才十 草木部才二十四草類云、菊「四声字苑」云、

菊 挙竹反、本草經云、菊有白菊紫菊
日精草也
加波良与毛岐一云、可波良於波岐

『和名抄』にも字音由来の和名を何とも言つてなく、私の調査では、菊の語源を明確にすることは出来なかつた。

次に菊の歴史について検討して見よう。

八代集に於て菊は八十四首よまれている。ここで奈良時代に眼を転じ『万葉集』について考察したが一首も見渡らない。しかし菊の異名の一つ「モモヨグサ」が明らかにされた。

万葉集 卷二十、四三六生玉部足國

父母我・等能能志利弊乃 母母余具佐

母母与伊豆麻勢 和我伎多流麻豆

諸註釈書によると、いずれも疑問となつておりこの場合かならずしも菊とは考へられない。また『大言海』に「後水尾天皇御製「ならノ葉（万葉集）ノえらびニ漏レシ、菊ノ花、残レル梅ノ恨ミヤハアル」とあり、『万葉集』に菊はないとしておられる。

では菊は何処の原産であり、いつ頃日本に輸入されたものであらうか。

『植物学九十年』『続植物記』（牧野富太郎著）『学習大辞典植物篇』『児童百科辞典』の仁徳天皇の頃（三三一完

九 支那から渡来したと言う説、『大言海』の奈良の末期に渡来したと言う説の二説がある。私の今迄の調査では両者を確定する資料を得ることは出来なかつたが、『懐風藻』『凌雲集』『経国集』を考察すると菊は六首、五首十五首よまれており、懐風藻で境部王（天武天皇皇子）が菊を賦しておられる。『万葉集』にも菊は勅撰されていない故、懐風藻は当時日本に存在していなかつたが、菊を素材とした漢詩を踏襲しているのではないかと言う疑問も生じて来るが、境部王が菊を詠んだのは二十五才であり、六八〇年頃には、園芸品として支那から日本へ渡来していたと考えていいのではないだろうか。奈良の末期説は、和歌で初見であると言う思考によるのであろう。

『続植物記』で牧野富太郎氏は次の如く述べておられる。「もう一つ心強い事は日本のものにも此の花と同じ種に属するものがある。明治十九年頃に私が見つけたもので、其菊は野路菊と言ふ。」

すなわち野路菊が四国で発見される迄は、支那から輸入されたものだけが人々の眼に映じていたものと思われる。『学習大辞典植物篇』によると、仁徳天皇の頃輸入されたのは青・黄・赤・白・黒の五品種のものであつたと述べておられるが、今迄の調査では白・黄の二色であり他は明瞭でない。

萩・女郎花と比較して、菊には長寿延命の思想が存在し

毎年重陽の節句には、菊花の宴を開いていた様である。我
国に於ける重陽の節句の起源はいつ頃であらうか。
小沢正夫氏は『国語と国文学』（昭三、七）で、次の如
く記述しておられる。

「わが国での起源は、天武天皇の十四（六八六）年である
というところであるが、この節句に詠詩がむすびついた
のは、八〇九年に平城天皇が神泉苑で射礼を御覧になつ
た時に、かねて文人をして詩を賦せしめたのが記録に見
える最初であらう。」

また凌雲集、経国集に於いても伺われる。重陽の節は天
武天皇の御代に初めて行なわれ、嵯峨天皇の時代を最高頂
に榮え、高い所に登り菊酒を飲み病を癒し長寿延命を祈つ
たものと思われる。

こゝで八代集について考察する。

拾遺和歌集 卷三 秋 一八五

題しらす 躬 恒

長月の九日ごとにつむ菊の

花のかひなく老いにつむかな

とうたわれており、『源氏物語』帚木の巻に於いても明
らかである。

二、色 彩
オ一表

不明	承和菊 (黄菊)	白菊	古今和歌集	後撰和歌集	拾遺和歌集	後拾遺和歌集	金葉和歌集	詞花和歌集	千載和歌集	新古今和歌集
9		6								
11		4								
5	1	1								
7		10								
1		2								
2		4								
1		8								
10		2								

この表は、八代集に於ける菊の色彩を内容から調査したものである。

一見して分るように、白菊と承和菊に限定され承和菊は一首で白菊が圧倒的に多く、今日のそれとは少々趣を異にしている。では承和菊はいかなる色彩であるか詳細に眺めて行きたいと思う。

拾遺和歌集 卷十七、雑秋 一一二〇

題しらず よみ人しらず

かのみゆる池辺に立てるそが菊の

茂みさ枝の色のてこらさ

植物図鑑等には、そが菊と言う言葉は見渡らない。『大言海』ではこの歌を引用し、次の如く記述している。

「奥儀抄」そが菊トハ、黄菊ナリ、承和ノ帝ハヨロズノモノ黄ナル花ヲメデタマヒテ、菊モ、黄ナルヲ愛シタマヒケルナリ」

ヒケルナリ」

『大日本国語辞典』にも同様にこの歌を引用し黄菊としている。しかし『八代集抄』では、

「そがきく承和菊、黄菊等の説定家卿用ひ給はず……」

と述べてあり、定家卿は否定しておられる。では、当時は黄菊はなかつたのだろうか。時代

をさかのぼり、懐風藻、凌雲集、経国集について考察しよう。

オ二表

不明	黄菊	白菊	懐風藻	凌雲集	経国集
6					
4	1				
11	4	1			

一首のうち、白黄と有り

凌雲集

(文章生相模権博士大初位下桑原公腹赤二首)

『言海』ではこの歌を引用し、次の如く記述している。

秋日於丈人山莊興飲探得簪字

聞有幽栖地。捫蘿試一膽。白雲杯下起。

黃菊。掌中黏。野近獸馴坐。……………

經國集

卷才一、重陽節菊花賦 太上 天皇

白藏氣季。玄月天高。……………干時衆芳彫寒

菊咲。殊蒼鬱。独照曜。或素或黃。滿庭

芬馥

卷才十三詩十二雜詠三

雜言。九日翫菊花篇太上 天皇

沈寥兮旻穹。蕭索兮涼風。……………翫菊花

菊韞黃

卷才十三詩十二雜詠三

雜言。九日翫菊花篇應製滋善永 妻

萋菊芳繞清潭。……………翫黃花。

黃花無厭 日將斜……………

卷才十三詩十二五言。病中九日飲。良安世

聞說重陽至。秋中菊酒情。……………把盞數頰

齡。彭沢黃花味。齊諧赤実馨……………

以上の調査により、当時黃菊は存在していたと考えられる。故にこの承和菊は、黄色であるとする『大言海』『大

日本國語辭典』の説に従った。

また『和名抄』に、「菊有、白菊紫菊」とあるが、今迄の私の資料では、はつきりと紫菊となつてゐるものはない。また『学習大辭典植物篇』では仁徳天皇の御代頃五色の菊が輸入されたとしておられるが紫菊はなく、平安時代にはなかつたと想像される。しかし八代集に於ては、白菊が紫色に変色したのを後の盛りとして愛翫しており『和名抄』に言つてゐる様に、紫菊があつたとすればそれを指したのではないだろうか。才一表に白菊としたのは、盛りの白菊と白菊が紫色に変色した菊を合せたものである。

すなわち、八代集には黃菊よりも白菊の盛衰の美しさを詠んだものが多く、平安時代の人々は白菊の盛りの美しさ、紫・紅色に変色した移ろう菊の美しさを愛し觀賞していたものと思われる。

三、菊の 状態

八代集の菊（八四首）の状態と荻（一〇三首）・女郎花（八一首）のそれとを比較検討し、更に『懷風藻』・『凌雲集』『經國集』『源氏物語』『枕草子』の菊を考察し、八代集に於ける菊の状態を研究した。

露を受けてゐる菊の状態が多く二〇、二パーセントである。しかしこの状態は荻・女郎花にも多く一、二位を占め

ており、菊だけの特徴ではない。

次にこれの内容から検討していこう。

荻・女郎花は、もつばら露が置いてある美しさを愛翫し、『古今和歌集序』に言っている如く、

「男山のむかしをおもひいでて、女郎花のひとときをくねるにも、歌をいひてぞなぐさめ」、また、「秋荻の下葉をながめ」ていたのである。これに対し菊の露は、病を愈し命を延る巧能があるとし、重陽の節の菊を特に愛翫していたようである。

古今和歌集 卷五、秋歌下 二七〇

是貞のみこの歌合の歌

紀 友則

露ながら折りてかざさむ菊の花

おいせぬ秋の久しかるべく

すなわち菊の露には、長寿延命の力があるとし、また久しく咲く花としよんでいるのが十二首あり、十四・三・パーセントである。

平安時代の人々は、菊に対して長寿延命の思想を抱いていたものと思われる。これは菊特有の思想である。

この思想はいつ頃から、日本に存在していたのであろうか。

『懐風藻』『凌雲集』『経国集』を考察すると、菊を延命のものとしているのは、『懐風藻』十六・七・パーセント、

『凌雲集』二〇パーセント『経国集』に於いては四〇パーセントを占めており、奈良時代から菊は、疫病を除き生命を延ばすと言う支那思想が存在していたと思われる。

次に興味深いことは、色の条件もあろうが、菊の香を扱ったものは『懐風藻』には三三パーセントを占めているが、八代集に於ては、二・四パーセントで菊の香に対しては関心が浅かったように思われる。『源氏物語』『枕草子』に於ても同様である。

八代集に於ては、移ろつた菊に興味を持つているが、これは菊特有の美であり、色彩の条でも考察した如く、当時の人は菊が紅・紫に変化したものを後の盛りとし、白菊の盛り同様に愛していたことが伺われる。

韻文と散文を比較することは、少々危険を伴うかもしれないが、『源氏物語』に於ても八代集と同様霜により色付き、また色の変り始めた菊を表現しているのが半分以上を占めている。

次に清少納言の『枕草子』を開くと、着せ綿をした状態を詠んでいるのが三三パーセントであり、『源氏物語』と比較して遙かに多い。

こゝにも菊は、長寿延命のものであると言う思想が伺われる。

四

研究テーマの前面に、大きく押し出された幾多の問題究

明の爲努力したが、各項目とも未熟なものであり、今後、このこされた課題に対し一層の努力を重ねたいと思う。

以上
〔三十二年卒業〕

「あはれ」「をかし」の一考察

東 矢 頼 子

一、

枕草子、徒然草については色々先学に於て研究され、今更いまでもないが清少納言、兼好が同一対象物についての様な観察描写をしているか。それを先ず、「あはれ」、「をかし」に現れた同一対象物について比較、考察してみようと思う。

方法として、

(一) その初めに枕草子、徒然草に於る「あはれ」、「をかし」の用例数からその頻度数(神佛、自然人事)をみる。

(二) 対象物別の表をもとに、同一対象物の観察描写の相違を検討する。

1 その際、特に徒然草の「あはれ」、「をかし」の用

研究テーマの前面に、大きく押し込まれた類多の目録

一方の枕草子と異なる二例について、それが混用か、観察態度の相違かを考える。

2 対象物別(神佛、自然、人事)について、各々検討する。

二、

(一) 「あはれ」、「をかし」の総数及び分類表
(イ) 総数

徒然草	枕草子	あはれ %	をかし %
38	87	0.31	0.32
40	448	0.33	1.69

註、百分比は日本文学体系の本文の頁数による、

枕草子 一 二六五頁

徒然草 一 一一九頁

底本

改稿枕草子通解

金子元臣 著

徒然草(角用)

今泉忠義 著